

巣箱設置によるブッポウソウの保護と増殖

栄村立栄中学校科学部

代表 下村 恒彦

長野県

はじめに

ブッポウソウは、かつて日本全国に生息していたのですが、現在ではごく限られた地域でしか見ることのできない貴重な鳥です。長野県では、木曾郡御岳神社と八幡社がこの鳥の繁殖地として昭和10年に国の天然記念物に指定されました。しかし、現在ではここでさえ生息していません。また、その後は、諏訪大社が長野県で残されたただ一つの繁殖地とされてきましたが、最近になって、長野県の北の端に位置する栄村で10数つがい繁殖していることが信州大学の調査で明らかにされ、

昭和60年にこの鳥が県の天然記念物に指定されました。

栄中学校科学部では、村内に生息するこの貴重な鳥を保護するため、信州大学の中村浩志先生の指導のもとに毎年5月の連休に巣箱かけを行うなど、地元に住む人に広くブッポウソウ保護の重要性を知ってもらうための活動を続けてきました。今年、巣箱かけを開始してちょうど10年の節目にあたることから、この鳥の生態と行動を一層詳しく観察し、保護に役立てていくことを目的に活動しました。



ブッポウソウのいる栄村の集落の様子。

ブッポウソウは千曲川の河岸段丘にひらけた集落の裏側にある低山のブナ林で繁殖。

栄村に住んでいるブッポウソウは、低い山のブナ林に比較的まとまった数が生息していることで、全国的にみても珍しいといわれています。平成元年1月、県教育委員会と県文化財保護審議会により栄村は、ブッポウソウの住んでいる環境の保護について依頼されました。

ブッポウソウはブッポウソウ目のブッポウソウ科の中ぐらいの大きさの陸鳥（体長約30cm）。体に比べて頭が大きく平たく、くちばしは太く、先はかぎ型に曲がっている。口は大きく開く。翼は長く、しなやかで、上手に反転や急降下を行う。頭は黒く、体は青緑色、くちばしと足は赤色。翼には大きな白色の斑点があり、飛行時にはよく目立つ。日本の図鑑では目の周りを赤色に描いてあるが、実際には赤くない。

夏鳥として、日本の本州より南の平地から山地の林に住み、大きなスギ、マツなど針葉樹の多い場所を好むため、神社や寺の境内で観察されることが多い。大きな樹木の穴、電柱の穴、建物のすき間、ダムの排水口に営巣する。高い木の枯れ枝や電線にとまっていて、セミやコガネムシなど大きな昆虫を飛び立ってとらえ、再び見張りの場所に戻ることが多い。

低いがよく通る鳴き声は、ゲッゲッと聞こえ、ゲゲゲゲゲと続けて鳴くこともある。かつてこの鳥は、夜中に「仏、法、僧」と鳴くと言われ、そのためにブッポウソウという名前がつけられました。しかし昭和10年、このように鳴く鳥はクロウの仲間のコノハズクであることが判明。そのためブッポウソウのことを「姿のブッポウソウ」コノハズクのことを「声のブッポウソウ」とよぶこともある。昭和10年国の天然記念物に指定。

営巣が確かめられた巣箱の中には、缶ジュースの栓、貝殻、小石、瀬戸物、プラスチック片、おはじき等があった。これらは「砂のう」でひき臼として使われ、食物をすりつぶすのを助けるはた

らきをしている。

ブッポウソウの食物は、トンボやクワガタなどの甲虫類で、親は餌をほとんど丸飲みにしてきてひなに与えるため、ひなが昆虫の体の外側の硬いキチン質の甲を細かくくだき、内側の肉を消化するには砂のうの砂だけでは足りない。昆虫を貝殻と貝殻の間にはさみ、砂のうの筋肉の力で押しつぶし、さらに細かくくだいていくには、硬く大きなものが必要だが石では重すぎる。おそらく貝殻、瀬戸物、最近では缶ジュースの栓などが使いやすいのであろう。「ひき臼」を使っているのはひなだけではなく、成鳥も使用していることが最近わかった。もともと貝殻や平らな小石などを使っていたのが、住む環境が変化してきたため、「ひき臼」の材料も変わってき、缶ジュースの栓、瀬戸物など危険な「ひき臼」も使うようになってきたのではないか。これが原因で死んでもいるようである。

「栄村の自然」栄村教育委員会編より

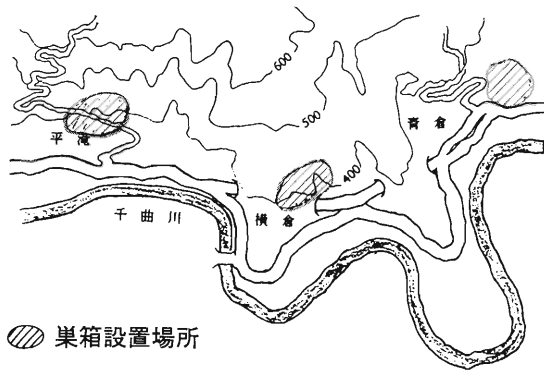
巣箱調査

ブッポウソウは自分で巣穴を掘れず、自然にできた樹洞や他の動物の巣穴を利用する。多くのブッポウソウはキツツキの巣穴をムササビが大きくしたものを使っている。その意味で適当な巣穴が得られないために繁殖ができない場所があることや、毎年使っていた営巣樹が知らずに伐採され、その林に住まなくなることがわかってきた。そのため巣箱設置の活動を続けている。

巣箱は杉の板を使って作り、底板にはキリで穴を数カ所開け、箱の中に水が溜まらないようにした。また、箱の底に、おがくずを5－8cmの厚さで入れた。

設置場所は図のとおりで、周りにひらけた空間が十分にあり、巣箱の2m以内に枝のないところを選ぶ。（最大の天敵であるヘビが枝づたいに巣箱

選ぶ。(最大の天敵であるヘビが枝づたいに巣箱に入らないようにするため) ブッポウソウが渡来してくる5月のブナ林の林床には日本海側低山帯のブナ林に特有なユキツバキが見られる。



本年度の調査記録

(栄中学校科学部ノートより)

4/30 巣箱作り 6個完成

5/4 巣箱つけ

(晴) 青倉地区→横倉地区→平滝地区

青倉・ブッポウソウは来ていなかった。

- ・ムササビが飛んで行った。
- ・ムクドリのお卵7個発見(5月末見に行く)

*ムササビ、ムクドリが巣箱を使用中

横倉・「ゲッゲッゲ」と鳴く声。ブッポウソウがいた。

平滝・ブッポウソウの巣を発見。ムササビの巣のあとにブッポウソウが巣を作った。

- ・巣の中に親があきらめてしまったらしい卵があったので、回収して標本を作ることにする。

5/19 ブッポウソウの観察

青倉、横倉、ブッポウソウはいなかった。

6/7 ブッポウソウ観察会

飯山市立飯山第一中学校、豊田村立豊田中学校と合同11時に平滝駅に集合

開会式 1 始めのことば

2 自己紹介(田中雄一)

「今日は、遠い所までお越しくださいましてありがとうございます。今日は鳥を中心に観察したいと思います。栄村の鳥がブッポウソウです。ブッポウソウは東南アジアからやってくる渡り鳥で、とても珍しい鳥です。夏になると栄村にやってきて卵を生み、ひなを育てます。今日は皆さんと一緒に観察ができるといいです。それから、ブナ林も日本では少なくなっています。栄村では大切にしています。」

3 徳武裕也先生の紹介(信州大学生物学教室)

4 各学校先生方紹介

5 今日の予定

6 おわりのことば

観察とまとめ

青倉・ブッポウソウは来ていなかった。

- ・巣箱はオシドリが使用中。

*水鳥であるオシドリが巣箱を使用しているのは非常に珍しいため、信州大学生物学教室の中村教授が小型カメラを設置。メスが抱卵中でふ化予定日は6月9日。その後近くの川へ移動すると思われる。

横倉・「ブッポウソウがいました。人がいたので、何回も様子を見に来ました。でも、じっとしていませんでした。とまっているところを観

待ってもじっとしませんでした。

飛んでいるブッポウソウを見ました。赤いくちばしと羽の白く丸い模様が見えました。はとより少し小さいです。目が丸くてかわいいです。

7/7 青倉・はとぐらいの大きさのつがいを電柱のところで見た。

横倉 「ゲッゲッゲッ」とブッポウソウの鳴き声がした。飛んでいく姿を見たのでフィールドスコープを設置して帰ってくるのを待つ。

30分以上待った。

- ・Aの巣箱の周りに1羽。巣の周りを飛んで様子をうかがっている。
- ・Bの巣箱から1羽出てきた。餌を与えて出てきたところと思われる。

平滝・ブッポウソウらしい鳥が2羽

今後の展望と課題

森のすみかを奪われたブッポウソウが、二次的に移りすむようになった神社仏閣の境内でも次第に姿を消していくのは巣穴と餌の問題が大きいと思われる。

巣穴の関係上ブッポウソウのすむ場所には大型キツキとムササビがすんでいる必要があるが、これら巣穴提供者もいなくなっていることが、多くの神社仏閣でブッポウソウが見られなくなっている原因の一つと考えられる。

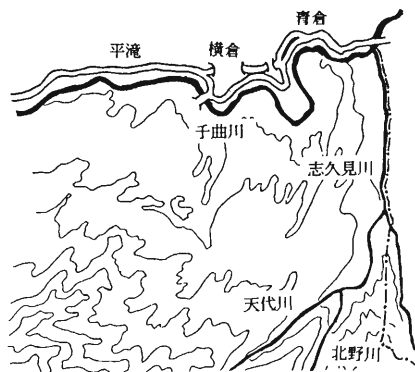
もう一つの原因が餌の問題であろう。ブッポウソウが運ぶ餌はクワガタ、カマキリ、コガネムシ類などの大型昆虫である。4～5羽の雛を育て上げるには、大量の昆虫が餌として必要であり、これらの昆虫がすめる環境そのものの維持がきわめて重要である。

○巣箱設置と利用状況の観察

栄村ではブッポウソウが本来の環境（ブナ林）に生育している点で重要である。長野県におけるブナ林は、垂直的にみると主に標高1100m～1800mの間に分布しているが、北部の栄村の山では、その下限が急に下がり、650m位から出現する。このことがブッポウソウの生息を可能にしているらしい。毎年繁殖する場所は、ほぼ決まっているので、巣箱を設置しているこれらの森へのブッポウソウの出入りと、巣箱での繁殖確認をこれまでどおり続けていく。特に巣箱使用の確認はビデオカメラを設置し長時間継続して行うことにする。

○ブッポウソウが繁殖可能な森の調査

これまでの経験や平成2年度新潟大学の石沢進先生と行った植生調査の資料から、村内の森を調べ、繁殖の可能性のありそうな森（亜高木層に広い空間があること。標高が高すぎないこと。直径50cm以上のブナ）にも巣箱を設置していく。来年度は志久見川、北野川、天代川周辺の森にも設置予定。



○食物以外の物を集める習性の観察

ブッポウソウは餌の大型昆虫を摂取する際、消化器官の負担を軽くするために「ひき臼」として貝殻などを使用していると言われているが、これらの物は求愛の道具としても使用されているのではないかとの指摘もある。

「ニュージーランドやオーストラリアにすむニワシドリ類のオスは、求愛のために小屋を作るこ

とが知られているが、その小屋はメスの関心をひくために様々なもので飾られる。その飾りとブッポウソウが運ぶものがよく似ている。ブッポウソウにとって、繁殖のための巣穴は貴重である。先に繁殖地に渡ってきたオスは、まず巣穴を確保し、後から渡ってきたメスにその巣穴を示すことでつがいになろうとしている。その場合オスが貝殻などをくわえて求愛し、巣穴を誇示するために使っているであろう。事実、それにあたると思われる行動も観察されている。この点について詳しく調査したら、交尾期に運ばれる貝殻やアルミ片など奇妙な物は、求愛の道具として使われていることが実証できるかもしれない」と中村教授や田畑先生らは考えている。

○他の地域の繁殖地との交流

長野県下で長年ブッポウソウの繁殖地であった諏訪大社では、平成3年の一つがいの繁殖を最後に、以後繁殖は行われていない。また最近、下伊那で繁殖が見つかった。これらの地域の様子を見学、調査し、今後の活動の参考としたい。

おわりに

ブッポウソウは4月下旬から5月初旬に日本に渡来し8月中旬ないし9月中旬までいる渡り鳥である。そのため越冬地のボルネオ、ニューギニアなど熱帯雨林での森林伐採による環境破壊の影響とも無関係とは思われない。特に本年、巣箱での繁殖が一例も確認されなかったことについて中村教授は「こんなことは今までで初めて」としながらも、先年来のインドネシアの山林火災の影響を被ったのではないかと考えている。他の多くの野生動物の保護と同様、一地域、一国での保護活動には限界がある。将来的には国際的な保護活動とも連絡、関係がもてるよう長期的に地道な活動を続けていきたい。